「教職教育部」での成果と課題

―6年間を振り返って―

田　中　保　和*

（TANAKA Yasukazu）

1．はじめに

平成23年4月から近畿大学教職教育部にお世話になり、教職を目指す学生の指導に当たって6年が経過し、この3月で区切りを迎え、これまでの教員養成における成果や今後の課題等について整理してみた。

振返ってみると、大阪府での高校理科教諭、教育委員会指導主事、府立高校校長、教育監等を経て、35年間の経験を踏まえ、近畿大学教職教育部で教員養成に携わることになった。

整理にあたっては、「2．教職教育部での6年間」「3．更なる発展に向けて」「4．まとめに」の3部構成とし、「2．教職教育部での6年間」においては、(1)「教職に関する科目」の授業担当者として、(2)「教員採用選考対策指導」を通して、(3)「教職ナビ」について、(4)「教職教育部長」として、(5)「6年間を通して」の5項目について分類した。

2．教職教育部での6年間

(1)「教職に関する科目」((　)内は開始セメスタ）の指導を通して

近畿大学は教員養成学部を有しない開放制の教職課程のため、各学部の卒業単位に教員免許取得に必要な単位を上乗せして修得しなければならず、さらに、1年前期から4年後期までに5つの関門をクリアしながら修得しないと教員免許を取得できないシステム(注1)となっており、免許取得は容易ではなく、取得者数は1年前期の「教職入門」履修者の約半数に留まっている。

このことは、ただ何となく教員免許が取得できれば良いという意欲の薄い受講者の選別には優れたシステムであり、上級学年に行くほど授業での取り組み態度は格段に向上してくる効果が見られる。

また、開放制の長所として、教育学部という進路志望が一辺倒な学生達の集まりではなく、

＊ 近畿大学教職教育部教授

〔キーワード〕開放制、適正規模、教職支援、教職ナビ、教職教育部長

目的や考え方が多種多様な学部の学生が共に同じ教室で学修することで、学部を超えた幅広い学生同士の交流が得られ、教員となるに当たって人間の幅が拡がる効果を実感した。

なお、学生はそれぞれの学部の授業の合間に教職の授業を履修するため、同じ教職の科目が受講者総数に応じて相当数開講されているが、曜日、時間によって、100人を超える多人数授業から10人前後の少人数授業まであり、多人数でも少人数過ぎても教育効果を上げるには困難を感じることが多く、科目によっての適正規模があると考え、それぞれの科目について次に言及するが、この6年間で、冨岡教務委員長を中心に教務委員会で、特定の時間への集中を避けるよう考慮され、改善されてきたことに感謝している。

① **教職の意義に関する科目**としての**「教職入門」**[注2]（1セメスタ）は、第1関門科目であり、最初に修得しなければ他の「教職に関する科目」の履修は不可としている。さらに、毎授業時に小レポートを提出すること（このことで、教職に対する意識が高まったと述べる学生が多く、「教職の意義」を理解させる効果があった）、欠席が3回を超えると修得できないこと、半期15回の講義の途中で実施する「教職課程基礎知識確認試験」に合格しなければ、その後の講義を受講できないというシステムになっている。講義の中で、私自身の学校現場や教育委員会での実体験を踏まえた話を通して、「教員としての使命」、「教職の困難さ」を伝えた結果、「そんな苦労してまで」と離脱する学生や、だからこそ「やりがいがある」として教職の意義を理解し、教職への努力を怠らず意欲の高い学生だけが、次のステップに残れたという成果があった。

ただ、課題として、入門科目でもあり履修者数が多く、何度か100人を超える授業を担当したときは、一人ひとりのきめ細かな指導には困難を生じた。教育効果を考えると50人程度が多すぎず少なすぎず、1講座の適正規模であろうと考える。

② **教職の基礎理論に関する科目**として**「教育行政学」**（2セメスタ）を担当し、科目名の通り17年間の教育行政経験を活かした、学校現場や教育委員会での実例を挙げた指導は、学生の興味を引き成果があった。受講生の生徒時代からは距離があり、理解が乏しかった文部科学省や教育委員会、生徒からの視点しかなかった校長や教員の役割や服務等についての理解は一定進んだ。さらに、文部科学省の要職を経験された徳永客員教授の2回の特別講義も学生に刺激を与える効果があった。

ただ、課題として、「教職入門」後の2セメスタからの選択必修科目であることから、後期に履修者が集中し、100人を超える授業も何度か担当し、きめ細かな指導が困難であったことから、「教職入門」同様50人程度が適正であると考える。

③ **生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目**として**「生徒・進路指導論」**[注3]（3セメスタ）を担当し、とりわけ運動系の学生にとって認識がまだまだ甘い傾向が見られた「体罰」禁止についての理解や生徒に対する「指導」と「支援・援助」の違いや重要性を理解させた。なお、「キャリア教育」については言葉自体初めて聴いた学生が多く、初等・中等教育段階での定着に課題を感じた。また、3セメスタの必修科目であり、前期に履修者が集中し、100人を超える授業もあり、「教職入門」等と同様50人程度が適正規模であると考える。

なお、生徒・進路指導に係る諸課題について、グループワークでディスカッションをあまり取り入れることができなかったことは反省点であり、残念に思っている。

④ **教育実習の事前指導**として**「教育実習指導」**（5セメスタ）を担当し、教育実習に臨むにあたっての心構えや準備についての講義を経て、学生全員が模擬スピーチや模擬授業を行い、学生同士の講評と私からの指導を踏まえて、本人から反省点等を発表させた。このことで、教職に向かないことを悟った学生も少数いたが、人前で話す勇気を身につけ、面白さを覚えた学生も多くいた。主体的・能動的な学修活動（アクティブ・ラーニング）を行った結果、この講座に対する学生からの授業評価は極めて高いものであった。

ただ、受講者全員に模擬授業や模擬スピーチを行う演習科目であり、最大60人近くの履修者があったときは一人当たりの時間が少なくなったことから、30人程度が適正と考える。

⑤ **最終科目**として**「教職実践演習」**[注4]（8セメスタ）を担当し、教員採用試験合格者も含め、教職課程受講の学生の総仕上げの科目として、30名前後の履修者数でもあり、4年間で成長した彼らにとって意義のある効果的な学修を行えた。ただ、卒業後、教職に就く学生と免許取得のみの学生には若干の温度差が見られたのは残念であった。

私自身、入学時の「教職入門」から卒業前の「教職実践演習」まで各学年での科目を担当し、指導にあたることができたことで、学生の4年間の成長を実感できるという喜びが得られた。

(2) 教員採用選考対策指導を通して[注5][注6]

「教師になりたい！」という熱い想いを抱いた学生たちの自主的なサークル「教職ナビ」生[注6][注7]（彼らは自ら、主体的・能動的な学修、アクティブ・ラーニングを率先している）を中心に一般学生の希望者含め、3年生後期から4年生前期にかけ「スタート講座」として、校長経験者中心に、空き時間を活用し、教職教養の問題演習、模擬面接指導、教育課題への場面指導、模擬授業等の指導を行った。

これらの指導を90分授業のコマ数でいうと、担当教員一人当たり、年間100コマ程度の時間を費やしただけの成果が現れ、3年生の指導初期の段階での弱々しく頼りなかった学生が、教員採用選考試験直前には立派に逞しく成長していく姿を観ることができ、その成果は結果に現れ、毎年70～90名の現役合格者と過年度を含めると200名以上の合格者を輩出してきた。[注5][注6]

合格者の笑顔を観ると苦労が報われ、達成感・充実感・感動がこみ上げてくる。特に今年の模擬授業直前指導では猛暑に負けず、4度も5度も繰り返し指導した甲斐があったと強く感じた。

ここまでの充実した指導体制が整ったのは、歴代の前川、上林、杉山の各進路委員長の功績が大であり、教職教育部と学務部の関係教職員の尽力があったからだと感謝している。

【その他の教職教育部の支援活動】[注5][注7]

①Eメール論作文対策講座（個別指導のため手間はかかったが、大阪府での論作文が廃止されてからは、受講者は減ったものの、面接個票やエントリーシート作成にも効果があった。）

②宿泊学習会（2回実施：3年生で12月に2泊3日、4年生で直前の6月に1泊2日：教職ナビ生、約100名参加、この宿泊学習を通じて、学生の教職への意欲が高められ、資質向上に繋がった。）

③春期集中講座（教職教育部教員及び学部教員：3月上旬：10日間（参加学生約200名）、全学協働の事業であり1年生からも参加でき、受講者の意欲喚起に繋がった。）

④教員採用試験合格者によるパネルディスカッション（10月下旬～11月上旬、パネラーとなった合格者の成長した姿は目を見張るものがあり、後輩たちも勇気づけられた。）

⑤近畿大学同窓教員親睦会（12月：参加者約200～300名、合格者披露と懇親会での近大マグロを目標に学生達は頑張った。）

本学教職教育部での「教職ナビ」生の指導を含めた「教員採用選考対策指導」を行っている「教職支援システム」(注7)(注8)は他にあまり例は見ず、他大学から問い合わせや見学が相次いでいる。

また、平成27年12月の中教審答申においても「教職課程を統括するシステムの設置」の必要性が唱えられているが、本学では先駆けて実施しており(注9)(注10)、他大学に誇れるところである。

(3)「教職ナビ」について(注7)(注8)

この6年間で強く印象に残っているのは、「教職ナビ」生たちとの出会いであった。進路委員会での上記(2)の「教員採用選考対策指導」において、「教職ナビ」生の活動が1年目から鮮明に印象に残っている。自主的で意欲的な彼らは、校長経験者を中心とした進路委員会での指導を通して、しっかりと成果を挙げ、多くの立派な現職教員を輩出してきた。彼らとの出会いで私自身、授業や教職業務の合間を縫った指導の忙しさも吹っ飛ぶほどの喜びが得られ、教員養成の真の楽しさとやりがいを身にしみて感じさせられたことは、本当に忘れられない思い出である。卒業後の「教職ナビ」生の活躍は素晴らしいものがあり、指導力を買われ初任から学校運営の中心となっている者や模範授業として研究授業を行っている者も多くおり、各学校で存在感を示していることは逞しい限りである。

また、彼らは教職を目指すという目的を一にし、苦労を共にした仲間であるからこそ、「教職ナビ」生同士の夫婦も数多く誕生し、結婚式にも招待され、幸せな家庭を築いていることを見るにつけ、係わってきて本当に良かったなと喜びを感じている。

(4)「教職教育部長」として

教職教育部に着任して、1年目は学生指導においても不慣れな点も多く、業務運営においても、いくつかの委員会に所属はしていたものの、業務内容全体を見通すまでには時間がかかり、教職教育部の先生方や学務部の皆様方には大いにお世話になり、この場を借りて感謝申し上げたい。2年目に、当時の増田教職教育部長（現副学長）から部長補佐に任命され、ほとんどの委員会に毎回出席することで、教職教育部の業務内容全体が把握できるようになった。3年目からは教職教育部長として、全体を統括する立場で4年間務め現在に至っている。堀部長補佐をはじめ皆様方の支えにより、学生に関する問題、授業に関する問題、カリキュラムの問題、

組織に関する問題等、様々な問題に対応してきた。歴代の部長に比べてどれほどのことができたか、反省すべき点は多かったが、皆様方のご協力・ご支援のおかげで、任期の 4 年間を終えようとしている。この経験が次のステージで活きるものと信じており、本当に感謝の気持ちで満ち溢れている。

(5)「6 年間を通して」

この 6 年間で近畿大学は大きく飛躍したと実感している。キャッチコピーにもあった、単に「マグロだけの大学」ではなく、日々の熱心な教育活動、研究活動、広報活動等を中心に実績を積み重ね、4 年連続志願者数日本一を記録するなど、全国的にも国際的にも最も注目される大学に発展してきた。(注11)

とりわけ広報活動の充実が際立っている。「近大コメンテーターガイド」として、報道関係者に全教員の専門分野等を明記した「近畿大学教員名鑑」を提供し、随時取材を受けられるようにしている。ご多分に洩れず、私自身もこの 4 年間で教育問題に関して、テレビ、新聞、雑誌等、15回程度取材を受けており、「これからすぐに取材に行く」との連絡が入りタイトな日程の中、集中して回答内容を吟味・検証することで、私自身相当鍛えられ自己研鑽に繋がったと考えている。

また、近畿大学で毎年 8 月に実施する「教員免許更新講習」(注12) を 6 年間「教育政策の動向についての理解」を担当し、現職教員対象に年々刻々変化する教育の最新事情についての講義を行ったことで、「教育行政学」「教職入門」等の科目の講義内容の工夫・改善にも繋がった。

他大学との交流については、阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会（以下、阪神教協）の幹事校の一員として参加し、課題研究会において 3 度の事例報告 (注6) (注7) を行った。また、近畿大学は平成26年度から全国私立大学教職課程研究連絡協議会（以下、全私教協）の副会長校となり、平成28年度からは事務局校となる順番であったが、平成28年 7 月の全私教協の一般法人化（「全国私立大学教職課程協会」に名称変更）に伴い、事務局校は玉川大学に置くこととなり、私は業務執行理事 (注13) の一人に就任し、不慣れな中でも、月 1 回の常務理事会活動等を通して、教育職員免許法の改正や私立大学教職課程の諸課題等についての理解が深まり、多忙な中の就任ではあったが、全国的な視野に立てるという成果が得られた。この間、全私教協の研究大会での報告 (注2) や「私立大学の特色ある教職課程事例集」への投稿 (注8)、研究交流集会でのシンポジスト (注14) などを経験したことで、学問的にも人間的にも幅が広がったと考えられ

るのはありがたいことである。

3．更なる発展に向けて

児童・生徒の人格の完成を目指す教員にとって最も大切なのは人間性であり、この6年間、内4年間は教職教育部長として率先して、「教職に関する科目」の指導や教員採用選考対策指導を通じ、単に知識や技能の習得だけでなく、教員として備えるべき重要な資質のひとつである「豊かな人間性」を育むことができたという自負がある。私にとって、将来の豊かな日本を築く教員の卵を育てると言う素晴らしい機会が得られたことに感謝している。

今後とも教職教育部が益々発展し、学校現場にとって有用な、児童・生徒思いの「豊かな暖かい人間性」を備えた教員を、多く輩出されることを強く信じている。

4．まとめに

この6年間の教員養成に限らず、教育に携わった41年間を振り返り、私として、まだまだ反省すべき点、改善すべき点があり、更なる研究と修養に努める必要があると考えており、これからも皆様方の暖かいご指導を仰ぎたいと考えている。

次の新たなステージにおいても、近畿大学教職教育部での数々の貴重な経験と、多くの人たちに支えられたことへの感謝の念を忘れずに、なお一層の努力を怠らず頑張って行きたい。

【注】

（注1）「教職課程履修要項」2016年度版　（近畿大学編）2016年4月

（注2）田中保和「『教職入門』における『基礎知識確認試験』の活用について―教職課程における『関門テスト』の効用―」（教師教育研究　第27号：全私教協）2014年3月

（注3）田中保和「生徒・進路指導に対する教職課程履修学生の意識と課題」（近畿大学教育論叢　第26巻2号）2015年11月

（注4）冨岡勝「教員間の連携で進める『教職実践演習』―近畿大学における教職教育部と各学部との連携―」（教師教育研究　第29号：全私教協）2016年5月

（注5）リーフレット「近畿大学が総力をあげて先生を養成します」（近畿大学教職教育部）2016年5月

（注6）田中保和「公立学校教員採用選考試験について－大学推薦等」（阪神教協ﾘﾎﾟｰﾄNo.38）

2015年4月

（注7）田中保和「教員採用に向けた大学の支援体制について―教職教育部の取り組みと教職ナビ―」（阪神教協ﾘﾎﾟｰﾄNo.37）2014年4月

（注8）田中保和「近畿大学『教職ナビ』10年の取り組み」（私立大学の特色ある教職課程事例集：全私教協）2014年5月

（注9）「平成19年度文部科学省『教員養成改革モデル事業』－教員養成学部を有しない総合大学における教員養成カリキュラムの改善モデル構築」（近畿大学最終報告書）2008年3月

（注10）杉浦健「近畿大学の教職課程における学内連携の構築プロセス」（教師教育研究　第28号：全私教協）2015年3月

（注11）山下柚実「なぜ関西のローカル大学『近大』が、志願者数日本一になったのか」（光文社）2014年11月

（注12）「教員免許更新講習（資料集）：（必修領域）『教育の最新事情及び教育課題への対応について』」（近畿大学）2011年8月～2016年8月

（注13）田中保和「全私教協での活動状況について―業務執行理事としての活動報告―」（阪神教協リポート№40）2017年4月

（注14）「一般社団法人全国私立大学教職課程協会『会報第71号（法人第2号）』」2017年4月